スペイン右派ポピュリズム政党支持者の排外主義をめぐるエスノグラフィ

Ethnography of Exclusionism among Supporters of Right-wing Populist Parties in Spain

池北　眞帆（IKEKITA Maho）

東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程（Graduate School of Arts and Sciences,The University of Tokyo）

キーワード　排外主義　スペイン　右派ポピュリズム　政党　エスノグラフィ

１　背景・目的

本報告の目的は、右派ポピュリズム政党の支持者がどのような過程で、そしてなぜ排外主義を擁護する政党を支持しているのか、支持者の生い立ちや日常生活から生起する意味世界に着目しながら、エスノグラフィックな研究手法を使用して分析することである。これらを通じて、各支持者がボックス支持をめぐる独自の文化を形成していることを最終的に論じる。後述のとおり、ここでいう文化とは、全ての支持者間で共有されるような固定的な支持文化を想定しているわけではない。文化の中には、特定の支持者が各自の人生や生活の中で形成してきた価値観を反映した、パーソナル事象を含んでいる。それは、相互作用の中で、周りの文化を借用したり拒絶したりしながら（モース、2018）、自己の定義、再定義を繰り返してそれぞれの支持者が形成していく、政党支持をめぐる独自の文化である。

本報告で研究対象とするのは、スペインの右派ポピュリズム政党ボックス（VOX）の支持者である。フランシスコ・フランコによる独裁体制（1939-1975）の終焉以降、同国は長らくこうした勢力の空白地帯であった。他の欧州諸国より遅れて 2000 年代以降に移民が急激に増加した「移民後発国」（小井土、2017）であったスペインにおいて、2018 年、排外主義を標榜する政党ボックスが躍進した。

ポピュリズム研究では、政治・社会的な状況などのマクロな視点から政党の台頭要因や支持理由が分析されることが多い。ボックス研究も上記の関心を共有している一方で（たとえば Rama et al.、2022 を参照）、支持者のリアリティを持った理解への関心は等閑視されてきた。上記の研究上の課題を乗り越える際に参考になるのが、社会学の Hochschild（2016=2018）に代表される、エスノグラフィックな方法を使って支持者の本音に迫った研究である。本報告では、右派ポピュリズム支持者の複雑な考えに迫るため、政党を支持する普通の人々の生い立ちや日々の営みから形成される意味世界を観察する。

２　研究方法・結果・考察

本報告では、政党の外国人に対する政策にかんして、特に明確な意見を持つ 2 名の支持者について考察する。上記のデータは、2023 年 4 月から同年 8 月までの期間、スペイン北部の地方都市に滞在して行った調査の一環で収集した。なお、同調査では 10 代から 70 代の政党支持者 9 名にインタビューし、そのうちより詳細な調査に同意が得られた 5 名に対してライフストーリーの聞き取り及び参与観察を行った。

60 代男性である G 氏は、2013 年の政党設立当初からの熱心な支持者である。1960 年代前半にスペイン北部の農村地帯で生まれ、現在は都市部に居住している。大学卒業後、公立の中等教育の教師を務めていた。近年、政治的正しさが求められる場面が多くなった教育現場に嫌気がさし、数年前に規定の年齢より早く退職した。政党に近いメディアを日常的に参照し、日課となっている読書の大半は政治的なテーマを扱ったものである。子供時代には 5 年間、出稼ぎ移民となった両親と共に欧州の近隣国に滞在した。フランコの死後、1980 年代まで左派政党に票を投じていたが、左派の政策失敗や汚職に失望し、1990 年代から

右派に転向した。スペインで 2000 年代に移民が急増した際には、国内の外国人、特にムスリムの存在に強い懸念を抱くようになった。そして、ボックスの外国人関連の政策の方向性を、スペインの一体性を守る政策として強く同意している。フランコ独裁体制時代については、悪い時代ではなかったと考えている。

20 代女性である A 氏は、文系の大学生である。学業の他、私立の語学学校に勤務して収入を得ながら、大学院修士課程への進学を準備している。15 歳でボックス支持者となり、18 歳で党員となった。最近まで政党の地方支部のボランティア活動に従事していた。政党を支持するようになったきっかけは、国家警察官である両親の勤務経験を聞く中で、バスク祖国と自由（Euskadi Ta Askatasuna）を強く批判するボックス政治家の主張に接し、強く共感したことである。自身を政党内でも既存右派に近いリベラルな支持層であると定義し、極端な思想を持つボックス支持者とは一線を画している。政党の外国人と中絶に関連する政策には同意していない。支持者としての活動が将来就職で不利になる可能性なども考え、最近では支持も揺らいでいる。

両事例から理解できるのは、各人の生い立ちから生起する各支持者の文化の「多様さ」である。G 氏はフランコ独裁体制下で幼少期を過ごしており、貧困から抜け出すために国外移住した。そして、両親が劣悪な条件下で安い労働力の提供を余儀なくされるという一種のトラウマ的な経験をしている。その後、2000 年代以降のスペイン国内での移民の急激な増加を転機に、特にムスリムへの嫌悪感を強めていった。G 氏自身の国外移住の経験は、スペイン国内の外国人に対して寛容さを示すことにはつながっていない。一方、フランコ体制下の良き時代の文化の借用、再生産によって、執拗なまでにボックスに関心を抱くことによって、支持をめぐる独自の文化を形成している。他方、A 氏のボックス支持の軸は、両親の国家警察官としての経験への思い入れから形成される警察文化の借用、再生産にある。しかし、新しい価値観を持った女性として、政党の古い価値観や極端な思考、外国人をはじめ特定の集団を排除する政策は拒否している。そして、全体としては支持への揺らぎをも含む独特の支持文化を形成している。このように、同じ政党の支持者でありながら、両者の政党支持をめぐる意味世界は極めて異なる。このような支持者の多様な側面は、政党が内包する矛盾と表裏一体の関係にある。スペイン政治において「最も右」に位置するボックスの支持者の間には、当然のことながら、A 氏のいうところのリベラルな人々だけではなく、極端な考えを持つ人々もいる。そこに政党が提示するボックスの主張をふまえた、支持者間の固定的な支持文化を想定できるわけではない。政党支持に関して特定の個人が見出す意味のディテールに着目してこそ、支持者のリアリティに肉薄できるのである。

＊本研究は JSPS 科研費 21J11003（2021-2022）および 22KJ0542（2023）の助成をうけた。

＜参考文献＞

Hochschild, Arlie Russell, 2016, *Strangers in Their Own Land: Anger and Mourning on the American Right*, New York: The New Press.（布施由紀子訳, 2018, 『壁の向こうの住人たち――アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店.）

小井土彰宏, 2017, 「スペイン:新興移民受入国のダイナミズム――なぜ 2000 年代を代表する移民国となったのか」『移民受入の国際社会学――選別メカニズムの比較分析』名古屋大学出版会, 244-5.

モース, マルセル, 2018, 森山工訳『国民論他二篇』岩波文庫.

Rama, Jose, Lisa Zanotti, Stuart Turnbull-Dugarte, and Andrés Santana, 2021, *VOX: The Rise of the Spanish Populist Radical Right*, Abingdon; New York: Routledge.